俳人協会 青森県支部

会報

発行所　俳人協会青森県支部
（事務局）
〒036-8241
弘前市桜ヶ丘５の１の15
☎ 0172-88-0400

コロナ感染

三年度総会は中止

俳句大会は紙上句会に

例年六月に開催している支部総会、俳句大会は今年も新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。代替策として、総会は会員あてに総会資料を送付して審議いただき令和二年度事業、決算報告、三年度事業計画案、予算案を原案通り承認を得た。

また俳句大会も同様に中止とし、「紙上大会」として開催した。今年の俳人協会東北大会・岩手大会も中止、紙上俳句大会になった。

東北大会・岩手大会も紙上大会に

シンバルの一打高らか五月来る

支部俳句大会　一位は敦賀恵子さん（青森市）

支部紙上俳句大会は、田島和生俳人協会評議員・「雉」主宰を特別選者に開催。投句数は三百六十八句。支部役員と合わせて二十六人の選者が選句した結果、青森市の敦賀恵子さんの句「シンバルの一打高らか五月来る」が23点を獲得、一位となった。恵子さんは「交響曲の中で、シンバルの存在は聴衆を奮い立たせてくれる。あの一打をもって、このコロナ禍を収束して欲しいという思いがあった。清々しい五月が来るのだからと。」と喜びを語った。

敦賀恵子さん

二位は八戸市の佐藤幸子さんが21点であった。

田島和生先生選天位は佐々木雅翔さん

特別選者・田島和生先生選の天位は佐々木雅翔さんの「牛小屋の安産札や花は葉に」だった。

三位以下の結果は次の通り。

③小杉郁子15点④村田加寿子14点⑤日野口晃13点⑥佐々木雅翔12点⑦小笠原聖子12点⑧中島五郎12点⑨村田加寿子11点⑩宮川暢子11点⑪加藤健一郎10点⑫外川幸子10点⑫島田よう子10点⑭髙田美津子10点⑮河村仁美9点⑯中澤玲子9点⑰森下睦子9点⑱聖雪9点⑲髙田美津子8点⑳中村しおん8点

（同点の場合は特別選の得点、選者の天地人、秀逸の数による）

県文芸コンクール作品募集

作品は雑詠一人三句。自作、未発表句に限る。葉書の裏面に作品を書く。表面には郵便番号、住所、氏名（必ずふりがなをつけ、俳号の場合は本名付記）、電話番号を記入する。応募は無料。賞は知事賞一人、準賞三人、佳作十人。入賞発表は十月上旬、県内三新聞紙上。表彰式は十一月七日、青森市のアラスカ。投句の締切は七月三十一日（土）必着。

宛先は〒030－0845、青森市緑1－15－5、中谷恭子さん。電話017－774－2032。

〔高点句〕

子ら植ゑし田に足形のにぎはへる　佐藤　幸子
自分史にまだある余白夏桜　小杉　郁子
みどり児に踏んばるちから聖五月　村田加寿子
風呂敷の結び目固く昭和の日　日野口　晃
牛小屋の安産札や花は葉に　佐々木雅翔
青き踏む母校の見ゆるところまで　小笠原聖子
田植終へ雨の明るき峡の村　中島　五郎
昼寝の子笑ひの壺にゐるらしき　村田加寿子
津軽路の野辺の送りや花林檎　宮川　暢子
岩木嶺の点描画めく植田かな　加藤健一郎
耕や村の時報のわらべ唄　外川　幸子
田水張る山よりの水山映し　島田よう子
明日あると信じ顔剃る新樹の夜　髙田美津子
夫に添ふ無理なき歩幅遠郭公　河村　仁美
ごくごくと水飲む農夫田水沸く　中澤　玲子
駈ける子の影まで青き風五月　森下　睦子
鳥のこゑ風のこゑ聴き草を引く　聖　雪
夫在らぬ世を生き抜いて草むしる　髙田美津子
代を掻く先代の田を少し売り　中村しおん

田島　和生　先生　選

天位　牛小屋の安産札や花は葉に　佐々木雅翔
地位　朝市の潮のしたたる海鞘を買ふ　佐藤　幸子
人位　昆布干しこのうぶすなの地を出でず　吉田千嘉子
秀逸　子ら植ゑし田に足形のにぎはへる　佐藤　幸子
風呂敷の結び目固く昭和の日　日野口　晃
植田澄む津軽は水の如くあり　くどうひろこ
どこかくらくてアネモネの花弁かな　吉田　敏夫
百年の松の根方に苔の花　郡川　宏一
追伸の二行がありて暖かし　伊藤ほうはく
半仙戯古稀を迎へて乗りにけり　橘　すなお
来し方は消えぬものなり蜷の道　加藤健一郎
まくなぎの付来る畦を巡りけり　丹野　慶子
シンバルの一打高らか五月来る　敦賀　恵子
みどり児に踏んばるちから聖五月　村田加寿子
春夕焼潮満ちて来し船溜り　稲場　暁子
梳くほどに潤む馬の目遠青嶺　三ケ森青雲
晴れわたる産院の空鯉のぼり　くどうひろこ
畦の子にときに手を振り田植かな　小林　五月

佳作　シンバルの一打高らか五月来る　敦賀　恵子
代掻機牛の歩幅で進みけり　小笠原聖子
風呂敷の結び目固く昭和の日　日野口　晃
青き踏む母校の見ゆるところまで　小笠原聖子
田を植ゑて水に力の湧きにけり　小笠原聖子
明日あると信じ顔剃る新樹の夜　髙田美津子
草餅のその色も香もいただきぬ　村山　いう
朝市の潮のしたたる海鞘を買ふ　佐藤　幸子
永き日の犬も負けじと大欠伸　成田　晃子
逃げ水の彼方生まれ故郷あり　岩田　秀夫
卓袱台をはみ出る馳走こどもの日　千葉　禮子
昼寝の子笑ひの壺にゐるらしき　村田加寿子
永き日や縁側の母聞き上手　工藤　邦子
花冷や怠けぐせつき鳩時計　稲場　暁子
鳥のこゑ風のこゑ聴き草を引く　聖　雪
青空を口いつぱいに鯉のぼり　馬場　裕子
老犬の綱をゆるませ青き踏む　村山　いう
夫に添ふ無理なき歩幅遠郭公　河村　仁美

木附沢麦青　選

木村　秋湖　選

天位　音少したてて田水の入り来ぬ　葛西　小櫻
地位　青き踏む母校の見ゆるところまで　小笠原聖子
人位　ほまち田の昔ながらの田植かな　鈴木　莉花
秀逸　風呂敷の結び目固く昭和の日　日野口　晃
葉桜や忘れられたる椅子ふたつ　野村　英利
一山を我がものとして春の蟬　佐々木雅翔
藤村の少女に出会ふ花りんご　須郷　権太
葉桜の清がしき道となりしかな　山田のぶ子
耕や村の時報のわらべ唄　外川　幸子
初夏の空引き寄せて湖の青　蒲田　幸子
稜線を柔らかくして山若葉　坂元　正子
母の日を忘れし母へ花束を　小田桐由紀子
百年の松の根方に苔の花　郡川　宏一
四阿の薄暑の風の中にをり　髙橋まちこ
流鏑馬の射手は美少女花の下　今田とみを
草餅のその色も香もいただきぬ　村山　いう
朝市の潮のしたたる海鞘を買ふ　佐藤　幸子
緑蔭に太極拳の広ごれり　相馬　禮子

佳作　夫在らぬ世を生き抜いて草むしる　髙田美津子
ごくごくと水飲む農夫田水沸く　中澤　玲子
昭和の世想ひつ甘藷植ゑにけり　髙橋　千恵
田植終へ雨の明るき峡の村　中島　五郎
石仏に火傷のあとや敗戦日　五十嵐かつ
田水張る生きざま水に映しつつ　木村あさ子
駈ける子の影まで青き風五月　森下　睦子
子ら植ゑし田に足形のにぎはへる　佐藤　幸子
また一枚消ゆる田んぼや蛙鳴く　永倉　みつ
思ひ切り酢にむせてゐる母の日よ　西村　セイ
花かたくり島の一景ひろげたり　秋谷美智子
青き踏む母校の見ゆるところまで　小笠原聖子
つくばひの水を綺麗に愛鳥日　後藤　朋子
新しき駅舎のポスト風薫る　中谷　恭子
鳥のこゑ風のこゑ聴き草を引く　聖　雪
田を植ゑてあとは星座にあづけけり　奥田　卓司
牛小屋の安産札や花は葉に　佐々木雅翔
夫に添ふ無理なき歩幅遠郭公　河村　仁美

小野　寿子　選

土井　三乙　選

天位　傍らに山菜置いて苗木売り　葛西　栄子
地位　水番のときどき唄を口ずさみ　小笠原聖子
人位　自分史にまだある余白夏桜　小杉　郁子
秀逸　耕や村の時報のわらべ唄　外川　幸子
花蘇芳夫の残せし万年筆　上重　佳子
ふるさとに修治と修司花林檎　榊　せい子
春惜しむ出番の多き小さき鍋　榊　せい子
田水張る山よりの水山映し　島田よう子
初夏の空引き寄せて湖の青　蒲田　幸子
噴水やいつか青空濡らさむと　吉田千嘉子
菜の花の迷路に齢忘れ来し　佃　正子
素手といふ捗るものや草を取る　敦賀　恵子
子供部屋いま父の部屋夕焼くる　佐々木寿子
昼寝の子笑ひの壺にゐるらしき　村田加寿子
青空に波音立てて吹流し　赤坂　良美
母の日の筆談の文字「ありがたう」　小笠原八千代
明日あると信じ顔剃る新樹の夜　髙田美津子
八十八夜雨となりつつ坂つづく　吉田　敏夫

佳作　部屋中に昭和が匂ふ棒鱈煮　雨森　虹女
若葉風脳の換気のストレッチ　三上　裕子
岩木嶺の点描画めく植田かな　加藤健一郎
人生は日々初舞台レース編む　樋口　京子
夏はじめ本名を知る県句集　佐々木寿子
昼寝の子笑ひの壺にゐるらしき　村田加寿子
じやぶじやぶとたましひ洗ふ山若葉　木村あさ子
封切つてふはつとふくらむ新茶かな　下山　延子
再会を一年延ばし心太　上重　佳子
乗り換への番線とびかふ紋白蝶　井手上省子
置き忘れの砂場のシャベルみどりの夜　木村　幸子
ジーパンの腿の大穴夏めきぬ　栗山　朗子
母に添ふ子馬のギャロップ風薫る　葛西　栄子
田を植ゑて水に力の湧きにけり　小笠原聖子
つくばひの水を綺麗に愛鳥日　後藤　朋子
鳥のこゑ風のこゑ聴き草を引く　聖　雪
緋牡丹の夜目に妖しく匂ひけり　工藤　祐子
薫風を吸ひしシーツの白さかな　馬場　裕子

草野　力丸　選

岩村多加雄　選

天位　男の子らは棒切れが好き栗の花　榊　せい子
地位　シンバルの一打高らか五月来る　敦賀　恵子
人位　春十とせ津波まがこと忘るまじ　石垣　浩造
秀逸　合唱の指揮は心平夕蛙　小田桐素人
みどり児に踏んばるちから聖五月　村田加寿子
うつ伏せに仰向けに田の昼寝かな　齊藤　君子
田を植ゑてあとは星座にあづけけり　奥田　卓司
津軽路の野辺の送りや花林檎　宮川　暢子
来し方は消えぬものなり蜷の道　加藤健一郎
まくなぎの付来る畦を巡りけり　丹野　慶子
自分史にまだある余白夏桜　小杉　郁子
水鳥の朱き足うら花いかだ　後藤　瑞江
葉桜や校庭に線あたらしく　中村　静江
ごくごくと水飲む農夫田水沸く　中澤　玲子
ゆびきりの相手は未来こどもの日　桜田　花音
こはごはと触れてあたたか袋角　鈴木　莉花
明日あると信じ顔剃る新樹の夜　髙田美津子
手際よく僧侶の捌く初鰹　鈴木ゆき子

佳作　夫に添ふ無理なき歩幅遠郭公　河村　仁美
奥の院の窓にあふるる柿若葉　宮内　香宝
津軽路の野辺の送りや花林檎　宮川　暢子
耕や村の時報のわらべ唄　外川　幸子
花冷や酒饅頭の湯気甘し　成田　晃子
こはごはと触れてあたたか袋角　鈴木　莉花
音たてて小船しぶけり夏岬　河村　仁美
村人の誰とも会はず麦の秋　畠山　容子
青嵐小流れ小魚遡る　村松　圭治
卓袱台をはみ出る馳走こどもの日　千葉　禮子
みどり児に踏んばるちから聖五月　村田加寿子
母の日を忘れし母へ花束を　小田桐由紀子
紅薔薇の香に止まれり車椅子　下河原　勝
子育ての頃の日記や聖五月　越後　則子
流鏑馬の射手は美少女花の下　今田とみを
青空に波音立てて吹流し　赤坂　良美
一人居て一人の食事薔薇の雨　嶋　えり子
鳥のこゑ風のこゑ聴き草を引く　聖　雪

奥田　卓司　選

天位　みどり児に踏んばるちから聖五月　村田加寿子
地位　手際よく僧侶の捌く初鰹　鈴木ゆき子
人位　岩木嶺の点描画めく植田かな　加藤健一郎
秀逸　田水張る生きざま水に映しつつ　木村あさ子
花かたくり島の一景ひろげたり　秋谷美智子
駈ける子の影まで青き風五月　森下　睦子
ごくごくと水飲む農夫田水沸く　中澤　玲子
子ら植ゑし田に足形のにぎはへる　佐藤　幸子
カタカナの声よく似合ふ初音かな　伊藤ほうはく
昆布干しこのうぶすなの地を出でず　吉田千嘉子
立ち眠る馬の立髪若葉光　山本もとい
コロナ禍の死んでたまるか菖蒲風呂　くどうひろこ
母の日の筆談の文字「ありがたう」　小笠原八千代
母の日やほらと差し出す花一輪　中澤　草子
涼意かな千畳敷の潮柱　草野　力丸
幼子の髪匂ひくる夏はじめ　竹浪　幸子
明日あると信じ顔剃る新樹の夜　髙田美津子
津軽路の野辺の送りや花林檎　宮川　暢子

佳作　シンバルの一打高らか五月来る　敦賀　恵子
青梅のおしくらに負けこぼれ落つ　一戸　鈴
草取りに疲れ切つたる軍手かな　清水　雪江
一つづつ手のひらが皿柏餅　鳴海　顔回
母の日やすべて我慢の母なりし　布施　協一
薫風を吸ひしシーツの白さかな　馬場　裕子
雪形もはるかや奥津軽に生く　奥田　卓司
明日あると信じ顔剃る新樹の夜　髙田美津子
稜線を柔らかくして山若葉　坂元　正子
昆布干しこのうぶすなの地を出でず　吉田千嘉子
暖かや触れよと首をのばす馬　西村　セイ
水番のときどき唄を口ずさみ　小笠原聖子
母の日の筆談の文字「ありがたう」　小笠原八千代
ごくごくと水飲む農夫田水沸く　中澤　玲子
奥の院の窓にあふるる柿若葉　宮内　香宝
松に来て五月の風に声のあり　土井　三乙
ぼうたんの殊更大き蜑の家　河村　仁美
夏来たる寺山修司に会ひに行く　石﨑　志亥

小野寺和子　選

天位　バリカンの起伏大きく端午かな　くどうひろこ
地位　自分史にまだある余白夏桜　小杉　郁子
人位　耕や村の時報のわらべ唄　外川　幸子
秀逸　花冷や酒饅頭の湯気甘し　成田　晃子
花時計秒針ながきみどりの日　雪田　樹理
噴水やいつか青空濡らさむと　吉田千嘉子
田水張る山よりの水山映し　島田よう子
どこかくらくてアネモネの花弁かな　吉田　敏夫
カタカナの声よく似合ふ初音かな　伊藤ほうはく
田植終へ雨の明るき峡の村　中島　五郎
天井の高き内蔵雛の宿　丹野　慶子
連翹の花の形を散りて知り　葛西のり絵
シンバルの一打高らか五月来る　敦賀　恵子
立ち眠る馬の立髪若葉光　山本もとい
ひとつまみ足すや新茶の秤売り　野村　英利
ジーパンの腿の大穴夏めきぬ　栗山　朗子
代掻きの水は母なる岩木川　くどうひろこ
牛小屋の安産札や花は葉に　佐々木雅翔

佳作　子ら植ゑし田に足形のにぎはへる　佐藤　幸子
昼寝の子笑ひの壺にゐるらしき　村田加寿子
代を掻く先代の田を少し売り　中村しおん
マニラより津軽に稼ぎ梅漬ける　斎藤ひでを
シンバルの一打高らか五月来る　敦賀　恵子
男の子らは棒切れが好き栗の花　榊　せい子
ごくごくと水飲む農夫田水沸く　中澤　玲子
新樹光男子は森の匂ひして　宮内　香宝
あでやかな石狐の目元穀雨かな　外川　幸子
三階に御蚕の部屋麦の秋　髙野万津江
菜の花の迷路に齢忘れ来し　佃　正子
蜜豆の色とりどりを掬ひけり　鳴海　顔回
梳くほどに潤む馬の目遠青嶺　三ケ森青雲
うつ伏せに仰向けに田の昼寝かな　齊藤　君子
石像をやはらかくして青葉雨　竹浪　幸子
夫在らぬ世を生き抜いて草むしる　髙田美津子
どこかくらくてアネモネの花弁かな　吉田　敏夫
椿落つ愛犬ユウタの墓の辺に　髙橋千夜湖

栗山　朗子　選

小泉　静子　選

郡川　宏一　選

今　順子　選

天位　子ら植ゑし田に足形のにぎはへる　佐藤　幸子
地位　春炬燵触れば毀れさうな母　小笠原聖子
人位　こはごはと触れてあたたか袋角　鈴木　莉花
秀逸　物干へ逃げて子猫の反抗す　山口せつ子
　　シンバルの一打高らか五月来る　敦賀　恵子
　　麦秋の空の確かさ鳶の舞　和田たかし
　　青き踏む母校の見ゆるところまで　小笠原聖子
佳作　新緑や碑の肩まろやかに　黒田　長子
　　千空の書の筆勢や風薫る　対馬　迪女
　　梳くほどに潤む馬の目遠青嶺　三ケ森青雲
　　街路樹のざくりと剪られ街薄暑　下山　延子
　　田水張る山よりの水山映し　島田よう子
　　夫在らぬ世を生き抜いて草むしる　高田美津子
　　一山を我がものとして春の蟬　佐々木雅翔
　　夫に添ふ無理なき歩幅遠郭公　河村　仁美
　　どこかくらくてアネモネの花弁かな　吉田　敏夫
　　村人の誰とも会はず麦の秋　畠山　容子
　　代を掻く先代の田を少し売り　中村しおん

斎藤ひでお　選

天位　部屋中に昭和が匂ふ棒鱈煮　雨森　虹女
地位　田水張る生きざま水に映しつつ　木村あさ子
人位　シンバルの一打高らか五月来る　敦賀　恵子
秀逸　風呂敷の結び目固く昭和の日　日野口　晃
　　佐野ブルーのステンドグラス夏来る　対馬　迪女
　　母の日の筆談の文字「ありがたう」　小笠原八千代
　　牛小屋の安産札や花は葉に　佐々木雅翔
佳作　椿落つ愛犬ユウタの墓の辺に　高橋千夜湖
　　かはらけの里に水音夏来る　秋谷美智子
　　春夕焼潮満ちて来し船溜り　稲場　暁子
　　青空に波音立てて吹流し　赤坂　良美
　　白神の緑の光あびにけり　白鳥　青羽
　　薫風を吸ひしシーツの白さかな　馬場　裕子
　　田水張る山よりの水山映し　島田よう子
　　津軽路の野辺の送りや花林檎　宮川　暢子
　　草餅のその色も香もいただきぬ　村山　いう
　　夕さりの峰を映して田水張る　岩村多加雄
　　朝市の潮のしたたる海鞘を買ふ　佐藤　幸子

佐々木雅翔　選

天位　みどり児に踏んばるちから聖五月　村田加寿子
地位　子ら植ゑし田に足形のにぎはへる　佐藤　幸子
人位　明日あると信じ顔剃る新樹の夜　高田美津子
秀逸　母の日の筆談の文字「ありがたう」　小笠原八千代
　　植田澄む津軽は水の如くあり　くどうひろこ
　　昭和の世想ひつ甘藷植ゑにけり　高橋　千恵
　　田を植ゑて一枚づつの水の韻　鈴木志美恵
　　自分史にまだある余白夏桜　小杉　郁子
佳作　岩木嶺の点描画めく植田かな　加藤健一郎
　　白き帆の風に膨らむ薄暑かな　坂元　正子
　　シンバルの一打高らか五月来る　敦賀　恵子
　　葉桜や忘れられたる椅子ふたつ　野村　英利
　　子育ての頃の日記や聖五月　越後　則子
　　青き踏む母校の見ゆるところまで　小笠原聖子
　　白神のロッジの小窓明易し　白戸　星央
　　ほまち田の昔ながらの田植かな　鈴木　莉花
　　カウベルの音色溶け込む新樹光　中村しおん
　　緑蔭に太極拳の広ごれり　相馬　禮子

鈴木志美恵　選

天位　春深し千空展の余情かな　今　椿
地位　昼寝の子笑ひの壺にゐるらしき　村田加寿子
人位　夫在らぬ世を生き抜いて草むしる　高田美津子
秀逸　暖かや触れよと首をのばす馬　西村　セイ
　　田植機の泥丁寧に洗ふ父　小笠原聖子
　　一人居は楽し淋しと冷し酒　木村　秋湖
　　白神のロッジの小窓明易し　白戸　星央
　　夫に添ふ無理なき歩幅遠郭公　河村　仁美
　　花冷や酒饅頭の湯気甘し　成田　晃子
佳作　噴水やいつか青空濡らさむと　吉田千嘉子
　　身を細め紫陽花の径とほりけり　比内　順子
　　外つ国の人と写経の青葉寺　笹原　郁子
　　花かたくり島の一景ひろげたり　秋谷美智子
　　枝先の手踊りに似て花りんご　森下　睦子
　　母の日を忘れし母へ花束を　小田桐由紀子
　　植田澄む津軽は水の如くあり　くどうひろこ
　　新樹光男子は森の匂ひして　宮内　香宝
　　子ら植ゑし田に足形のにぎはへる　佐藤　幸子

高橋　千恵　選

天位　断髪に込める決意や麦の秋　高田美津子
地位　岩木嶺の点描画めく植田かな　加藤健一郎
人位　花蘇芳夫の残せし万年筆　上重　佳子
秀逸　また一枚消ゆる田んぼや蛙鳴く　永倉　みつ
　　春深し千空展の余情かな　今　椿
　　封切つてふはつとふくらむ新茶かな　下山　延子
　　鳥のこゑ風のこゑ聴き草を引く　聖　雪
　　四方の田へ急ぐ水先燕来る　鈴木志美恵
佳作　田植終へ雨の明るき峡の村　中島　五郎
　　菜の花の迷路に齢忘れ来し　佃　正子
　　事ひとつ了へて転げる夏座敷　下河原　勝
　　新緑やぐいと曲がりし岩木川　今田とみを
　　青空に波音立てて吹流し　赤坂　良美
　　母の日の筆談の文字「ありがたう」　小笠原八千代
　　怠惰なること春愁の言ひ訳に　工藤　祐子
　　母の日も生業の鍬けふも引く　白戸　星央
　　津軽路の野辺の送りや花林檎　宮川　暢子
　　牛小屋の安産札や花は葉に　佐々木雅翔

高橋千夜子　選

天位　うすきもの重ね八十八夜寒　岩田　秀夫
地位　追伸の二行がありて暖かし　伊藤ほうはく
人位　天空のどこからが夜花簪　小泉　靜子
秀逸　田植終へ雨の明るき峡の村　中島　五郎
　　青き踏む母校の見ゆるところまで　小笠原聖子
　　子供部屋いま父の部屋夕焼くる　佐々木寿子
　　八大龍のジャバラ鳴らせば立夏かな　筑田まさ子
佳作　かはらけの里に水音夏来る　秋谷美智子
　　村人の誰とも会はず麦の秋　畠山　容子
　　涼意かな千畳敷の潮柱　草野　力丸
　　破風美しや弘前城は花の中　外川　夕ケ
　　風呂敷の結び目固く昭和の日　日野口　晃
　　睦みあふ向かう三軒芝桜　古里　津勢
　　散松葉軍馬補充部碑の重し　小向　萩月
　　新樹光男子は森の匂ひして　宮内　香宝
　　新しき駅舎のポスト風薫る　中谷　恭子
　　再会を一年延ばし心太　上重　佳子
　　マニラより津軽に稼ぎ梅漬ける　斎藤ひでを

土田　紫翠　選

天位　風呂敷の結び目固く昭和の日　日野口　晃
地位　断髪に込める決意や麦の秋　髙田美津子
人位　夏来たる寺山修司に会ひに行く　石﨑　志亥
秀逸　再会を一年延ばし心太　上重　佳子
　　みどり児に踏んばるちから聖五月　村田加寿子
　　水玉の草間の犬や芝青む　小向　萩月
　　ふるさとに修治と修司花林檎　榊　せい子
佳作　カウベルの音色溶け込む新樹光　中村しおん
　　部屋中に昭和が匂ふ棒鱈煮　雨森　虹女
　　シンバルの一打高らか五月来る　敦賀　恵子
　　「ありがとう」みつをの色紙夏に入る　千葉　禮子
　　子育ての頃の日記や聖五月　越後　則子
　　流鏑馬の射手は美少女花の下　今田とみを
　　聞き役に徹し黙黙茄子を植ゑ　鈴木　操
　　総立ちのカーテンコール夏来る　油川　月萌
　　ぼうたんの殊更大き蜑の家　河村　仁美
　　白秋の詩を読みゐたりリラの花　畠山　容子
　　代を掻く先代の田を少し売り　中村しおん

対馬　迪女　選

天位　新しき駅舎のポスト風薫る　中谷　恭子
地位　撫新樹耳あてて聴く水の音　阿部みづき
人位　田水張る山よりの水山映し　島田よう子
秀逸　まくなぎの付来る畦を巡りけり　丹野　慶子
　　百年の松の根方に苔の花　郡川　宏一
　　葉桜や校庭に線あたらしく　中村　静江
　　四阿の薄暑の風の中にをり　髙橋まちこ
　　鳥のこゑ風のこゑ聴き草を引く　聖　雪
佳作　素手といふ捗るものや草を取る　敦賀　恵子
　　外つ国の人と写経の青葉寺　笹原　郁子
　　蜜豆の色とりどりを掬ひけり　鳴海　顔回
　　かはらけの里に水音夏来る　秋谷美智子
　　傍らに山菜置いて苗木売り　葛西　栄子
　　うつ伏せに仰向けに田の昼寝かな　齊藤　君子
　　田植機の泥丁寧に洗ふ父　小笠原聖子
　　つくばひの水を綺麗に愛鳥日　後藤　朋子
　　白神のロッジの小窓明易し　白戸　星央
　　代を掻く先代の田を少し売り　中村しおん

西谷　是空　選

天位　物故者の選ある俳誌春の雷　久保　武美
地位　ひとつまみ足すや新茶の秤売り　野村　英利
人位　自分史にまだある余白夏桜　小杉　郁子
秀逸　追伸の二行がありて暖かし　伊藤ほうはく
　　牛小屋の安産札や花は葉に　佐々木雅翔
　　薫風を吸ひしシーツの白さかな　馬場　裕子
　　夏椿茶席の一花風を生み　江口　みよ
佳作　子ら植ゑし田に足形のにぎはへる　佐藤　幸子
　　胸元に大粒真珠夏に入る　赤坂　雪洲
　　焼き魚もマスクしそうな花見かな　山本こう女
　　捌く身に花のいろあり陸奥帆立　長島　喜美
　　昼寝の子笑ひの壺にゐるらしき　村田加寿子
　　母の日やすべて我慢の母なりし　布施　協一
　　母の日も生業の鍬けふも引く　白戸　星央
　　子供部屋いま父の部屋夕焼くる　佐々木寿子
　　夫に添ふ無理なき歩幅遠郭公　河村　仁美
　　草取りに疲れ切つたる軍手かな　清水　雪江
　　一山を我がものとして春の蟬　佐々木雅翔

野村　英利　選

天位　自分史にまだある余白夏桜　小杉　郁子
地位　散松葉軍馬補充部碑の重し　小向　萩月
人位　ふるさとに修治と修司花林檎　榊　せい子
秀逸　蛞蝓家を捨てたる哀しみも　日野口　晃
　　青田風いぐねの暮しうべなへり　江口　みよ
　　あえかなる梢に生気立夏かな　聖　雪
　　たどりつく形は同じ蝌蚪と蝌蚪　小泉　静子
佳作　牛小屋の安産札や花は葉に　佐々木雅翔
　　耕や村の時報のわらべ唄　外川　幸子
　　田植終へ雨の明るき峡の村　中島　五郎
　　行く春や海峡線は海に沿ふ　小野いるま
　　かはらけの里に水音夏来る　秋谷美智子
　　駈ける子の影まで青き風五月　森下　睦子
　　母の日やすべて我慢の母なりし　布施　協一
　　植田澄む津軽は水の如くあり　くどうひろこ
　　薫風の九尺二間を駆け抜ける　寺沢すすむ
　　新緑やぐいと曲がりし岩木川　今田とみを
　　ほまち田の昔ながらの田植かな　鈴木　莉花

畑中とほる　選

天位　行く春や海峡線は海に沿ふ　小野いるま
地位　津軽路の野辺の送りや花林檎　宮川　暢子
人位　白神は奥羽の背骨雪の果　山本もとい
秀逸　石仏に火傷のあとや敗戦日　五十嵐かつ
　　春夕焼潮満ちて来し船溜り　稲場　暁子
　　藤棚のむらさきの風匂ひ立つ　髙橋まちこ
　　籐椅子や猫のそばにはいつも母　中谷　恭子
佳作　ぼうたんの殊更大き蜑の家　河村　仁美
　　耕や村の時報のわらべ唄　外川　幸子
　　田植終へ雨の明るき峡の村　中島　五郎
　　花冷や酒饅頭の湯気甘し　成田　晃子
　　昆布干しこのうぶすなの地を出でず　吉田千嘉子
　　時鳥鳴くや古刹の深庇　和田たかし
　　母の日や妹より届く花の鉢　諏訪　正子
　　立ち眠る馬の立髪若葉光　山本もとい
　　夏霧や灯台かすむ北の崎　石澤　正
　　代掻きの水は母なる岩木川　くどうひろこ
　　畦の子にときに手を振り田植かな　小林　五月

三ヶ森青雲　選

天位　諦めも知足なりけりすみれ草　小田桐素人
地位　シンバルの一打高らか五月来る　敦賀　恵子
人位　白神のロッジの小窓明易し　白戸　星央
秀逸　白き帆の風に膨らむ薄暑かな　坂元　正子
　　コロナ禍を悠々自適鯉のぼり　渡邊　寂隆
　　暖かや触れよと首をのばす馬　西村　セイ
　　晴れわたる産院の空鯉のぼり　くどうひろこ
佳作　青空を口いつぱいに鯉のぼり　馬場　裕子
　　麦秋の空の確かさ鳶の舞　和田たかし
　　行く春や海峡線は海に沿ふ　小野いるま
　　合格のご褒美大きメロン買ふ　三上　裕子
　　駈ける子の影まで青き風五月　森下　睦子
　　紅薔薇の香に止まれり車椅子　下河原　勝
　　新緑やぐいと曲がりし岩木川　今田とみを
　　釣忍ホームの母を置去りに　中野渡　悟
　　田を植ゑてあとは星座にあづけけり　奥田　卓司
　　水の地球一トくるみして風薫る　土井　三乙
　　村人の誰とも会はず麦の秋　畠山　容子

吉田千嘉子　選

天位　子ら植ゑし田に足形のにぎはへる　佐藤　幸子
地位　田を植ゑて水に力の湧きにけり　小笠原聖子
人位　駈ける子の影まで青き風五月　森下　睦子
秀逸　田植終へ雨の明るき峡の村　中島　五郎
逃げ水の彼方生まれ故郷あり　岩田　秀夫
みどり児に踏んばるちから聖五月　村田加寿子
暖かや触れよと首をのばす馬　西村　セイ
草取りに疲れ切つたる軍手かな　清水　雪江
物干へ逃げて子猫の反抗す　山口せつ子
佳作　撒餌に鯉躍りきて夏に入る　今　椿
畑打ちの骨やすませる今朝の雨　小林　とみ
身を細め紫陽花の径とほりけり　比内　順子
武者人形どの子の顔にも似てをりし　藤田　正子
青空に波音立てて吹流し　赤坂　良美
男の子らは棒切れが好き栗の花　榊　せい子
田水張る山よりの水山映し　島田よう子
天空のどこからが夜花簪　小泉　靜子
カウベルの音色溶け込む新樹光　中村しおん

吉田　敏夫　選

天位　つくばひの水を綺麗に愛鳥日　後藤　朋子
地位　花時計秒針ながきみどりの日　雪田　樹理
人位　四方の田へ急ぐ水先燕来る　鈴木志美恵
秀逸　田植終へ雨の明るき峡の村　中島　五郎
武者人形どの子の顔にも似てをりし　藤田　正子
代掻機牛の歩幅で進みけり　小笠原聖子
籐椅子や猫のそばにはいつも母　中谷　恭子
代を掻く先代の田を少し売り　中村しおん
さうさうと風の足跡麦光る　森内　勇治
佳作　蛞蝓家を捨てたる哀しみも　日野口　晃
ていねいな母の癖ある春の帯　小野　寿子
羽根開く孔雀くるりと青嵐　小野　寿子
胸元に大粒真珠夏に入る　赤坂　雪洲
ジーパンの腿の大穴夏めきぬ　栗山　朗子
青き踏む母校の見ゆるところまで　小笠原聖子
鳥のこゑ風のこゑ聴き草を引く　聖　雪
田を植ゑてあとは星座にあづけけり　奥田　卓司
ゴムくちに咥へ髪結ふ今朝の夏　河村　仁美

五所川原俳句会文化顕彰を受賞

五所川原俳句会（松宮梗子代表）が令和二年度五所川原市教育委員会文化顕彰を受けた。

同会の永年にわたる俳句月例会や昨年度六十回を迎えた県下俳句大会の開催など五所川原から「俳句」の発信を続けることで地域文化の発展並びに五所川原市の文化振興に大きく寄与したことによる。

五所川原俳句会は県俳壇の中心的な存在であった故成田千空氏らが創設し、現在松宮代表が二代目代表として同会を率いている。

丁子谷悟教育委員㊧から表彰を受ける松宮代表

一層のご精進を

支部長　小野　寿子

皆様、お暑い日が続いておりますがいかがお過ごしでございましょうか。新型コロナウイルス禍の世をいま生き抜いていこうとしており、それなりの日常と存じます。

俳人協会青森支部といたしましても、昨年令和二年度の総会も、三年度の総会も開催出来ませんでした。東北大会青森大会も見送られ今年度の岩手大会も紙上形式句会となりました。

東北の各県からは、それぞれに紙上俳句大会の冊子が届いており、俳句は足踏みをせずコロナ禍をものともせずに頑張って研鑽を積み上げておるようであります。

青森県支部といたしましては、今年一月に事務局長の浜田しげるさんを見送り、痛恨の極みでありました。令和三年は、永年の課題であった「青森県吟行案内」に取りかかろうとしていた矢先のことでありました。永年のご苦労を偲び、改めてご冥福をお祈り申し上げます。

さて、今年度の総会・俳句大会は、本部より田島和生先生がおいで下さる予定でありましたが、ご選のみ頂戴いたしました。

お祝いごとでありますが、松宮梗子さんの五所川原市よりの文化顕彰の受賞、まことにおめでとうございます。

会員の皆様、どうぞこのような時代でありますので、心して一層の創作意欲の精進をと念じ上げます。

小野寿子さん「羽織」を上梓

小野寿子さんが「角巻」「夏帯」に続く第三句集「羽織」を上梓された。米寿を迎えられた寿子さんは、いつも着物を着こなしておられ、その凛とした動きには津軽人らしいじょっぱりの潔さがある。

雪国の過酷な自然と向き合い、ねばり強く生き抜く姿勢で、句作を積んでおられるのはすばらしい。

「沖」主宰の能村研三先生の帯文より

冬羽織小町の絵とてあざやかに
雪に雪また雪北国なればこそ
降りやまぬ雪や鹿の子の絞り着る
夏帯締めなまけ心もぎゆつと締め
津軽なり星の匂ひの凍豆腐

編集後記

◇コロナ感染拡大防止のため二年続けての総会中止・紙上俳句大会となった。これほどコロナが変異を繰り返し、しつこい病気とは。それでもワクチンが国民全体に行き渡り、集団免疫ができれば収束に向かうのではないかと期待している昨今である。来年は通常に戻ることを切に願っております。（協）